

軽い口づけを交わした後、アスモデウスは伊吹をシメオンのベッドに押し倒すと再び伊吹の唇に自分の唇を重ねた。

「はーあ、伊吹がぼくのこと好きって言うてるから安心できるけど、せっかく使ったインキュバスの入浴剤まで効果ないなんて、本当つまらない。」

「つまらないとか楽しいとか言う問題なの？」

「えー？だってせっかく楽しいことするんだから、しっかり楽しまなきゃ損でしょ？」

アスモデウスはそう言うのと伊吹の体を抱きしめぐるつとベッドの上で転がった。

アスモデウスは体の上に乗ることになった伊吹の鼻に、甘くスパイシーな香りが感じられた。

「アスモ、この匂いを軽く吸うと小さくうっとりとしたため息をついた。」

「そう。良い匂いでしょ？」

「うん。」

伊吹はアスモデウスの肩に顔をうずめると、改めてインキュバスの入浴剤の匂いをかいだ。

「しかしアスモデウスは、少し退屈そうにため息をついた。本当この件に関してだけはがっかり。これでぼくの魅了が伊吹にも効果的だったらもつと面白いのに。」

「アスモ、アスモはいつも魅了して言うけど、効果ないのそなたつまらないの？」

「アスモ、アスモの返事に伊吹は鼻で笑うとアスモデウスの体を軽く抱きしめた。」

「もう、好きにできてるじゃない。」

「そう？じゃあ、このお泊りをもつと楽しみたいからさせてよ。」

「え？」

「セックス。もう君のこと好きにできている。って言うんだったらさせてくれるよね？」

「伊吹はアスモデウスの発言にばちばちとまばたきをした。」

「そう。ここで。」

「ここシメオンの部屋じゃない!?」

「驚いた顔でそう言う伊吹の唇に軽く自分の人差し指を添えると、アスモデウスは伊吹のその言葉に反論した。」

「そう。ここはシメオンの部屋だけど、どうして伊吹にこの部屋に入って良いってシメオンが許可したか分かるかい?」

「え!?!? そ・そ・それはシメオンが私なら一緒にいても平気だと思っていたから?」

「そう。ぼくの魅了が君にだけは効果が無いの、シメオンとソロモンなら知っていて当然だよ。でも、本当にそれだけだと思っただけが理解できず、再びぱちぱちとまばたきをした。」

「伊吹はアスモデウスが言いたいことが理解できず、再びぱちぱちとまばたきをした。」

「アスモデウスはスッと目を大きく開くと情事の時にだけ見せる飢えたオオカミの顔になった。」

「シメオン、黙っているけどこの部屋を僕たちが使っても良い。って許可したんだよ?」

「は?」

「伊吹がアスモデウスの言葉が理解できないでいると、アスモデウスは説明を続けた。」

「だって、メゾン煉獄のお泊りに伊吹を連れてきて良い。って許可したのシメオン達だよ? ぼくのこ

とやぼくと伊吹の仲を知っているんだら・・・。って許可したのシメオン達だよ? ぼくのこ

メゾン煉獄でセックスをする可能性はあるのは、ある程度予想できることだよね?」

「そ、それは・・・。」

「問答無用。」

「アスモデウスはそう言うと、伊吹の性感帯の一つである耳たぶに歯を立てて噛みついた。」

「あん!」

「伊吹はアスモデウスの腕の中で抵抗しようと少し体をくねらせたが、アスモデウスの愛撫にあっけなく崩れ落ちた。」

「アスモデウスは伊吹の耳たぶに軽く何度か甘噛みをする、耳の穴に音を立ててキスをした。」

「はあ・・・。」

「アスモデウスが伊吹の耳から口を離すと、伊吹は快感の残り香をただよわせるうっとりとしたため息

をついて体の力を抜いた。伊吹は魅了は効かないけどぼくの愛撫は効果抜群なんだね。」

「そ・そ・え?」

「いまさら何を？って言いたいの？」

アスモデウスは伊吹のあごの下に顔を入れると、舌先で伊吹の首筋をくすぐるように舐めた。

「はっ・っ・っ！」

時にリズムミカルにステップを踏むように触れ、時に滑るように最も伊吹が心地よいと思う部分を滑り降りる。

無駄な動きの全くないその舌先の動きは、女の体を知り尽くしたアスモデウスだからこそできることだった。